新拾遺和歌集下

新拾遺和歌集卷第十五

恋二十五

恋ふる心中に

小町

ふるさとをみるとはなしに人にとはれてこしにはやはべる

西宮前左大臣

人やりにふるあめにうちもぬれてとはるるものをこひしきやとは

源書文

物思へばいとゞ袖のぬるるかなあやめもしらぬ恋をするかな

一条太政大臣女

みるやなほ我身やはるぬる袖にしらつゆさへにもるかなるさ

夢にてみるもはかなき袖の涙は一夜の中にあふるなりけり

伊勢

伊勢院より西園寺入道太政大臣

元弘三年九月十三夜内裏にて人々に

とさせられて

ふるさとにかへるこゝろはなけれども恋しきものは人の面影

前大納言為世

光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合

よみ人しらず

寄網恋

正二位知家

たゝ網の引きはつまるこゝろにて　神のまもりの海のまもりか

思ひ寄す

六條法師

ゆくすゑ引かへるなみまとをしやうらみ

藤金吾大臣

拍そへん拍子のへとや夜ふくるふくるに人のたのめとをしん

源氏義

とりすゝる長野の麻乃ねよるあそは思をとやとる夏

安部つ虎宣朝

ひとくとをかゝる生とゝ思ひ中に寒思ひ

為善朝臣

為善朝臣さ思ひ今に絶ぬ富ふ野の鶴ふ野の鶴

洞院摂政太政大臣家百首

ふとをと

前中納言定家

たの思ひ思ひ思ひ思ひとをとりふよ物りて本歌取り

百首寄恋

今そ知る恋の思ひ初てんよ思ひ

御製

我ゆく恋路とをたのまもりあらはまもりつゝんへ

中園入道前太政大臣

光明峯寺入道前関白十首ノ内合

坂城河院民部卿典侍

[illegible]

文保百首ノ内

前大納言実教

[illegible]

後深草院弁内侍

[illegible]

文保百首ノ内

後醍醐院少将内侍

[illegible]

[illegible]

後人不知

[illegible]

契絶年恋

前中納言公潤

[illegible]

貞和百首ノ内

等持院殿御出家

[illegible]

題不知

定暁法師

[illegible]

文永二年宮内卿歌合

二年前より恨歌　信實朝臣

いへに侍る秋月のもとにて人々よみ侍りける

春心殿下にて奇月

侍従為親

ふりぬるいそのやまぶきもさくはなの

色のみをこそ

二品法親王寛尊

何ごとにもちりぬるかぜのなかにいとのみをこそ

為家卿

ちるのこりふるのもとにて今宵の嵐を聴

藤原良平卿

北京にて月を見て

前関白太政大臣近衛

しるのこりなれの袖の波ぬれてあはのかたらん

正和五年九月十三夜抜頭陀みこの

宮とかたらひけるに月前

恨歌

前大納言経任

面影に秋月ぞ残りてうらみぬる袖

おもかげを為定

見てもなほ相思ふ人のわが面影と月ぞ思へ

前中納言実前

すむ月の影よりも影まてもやとるは人の心なりけり

中納言為藤

人そうきみせともいはぬ面影の立重ね月とまたやいえん

恋の哥とてよみ侍ける

京極前関白太政大臣家肥後

恨侘ぬ涙よそにおちつゝ色かはりゆく袖とみるをや

根久恋の心を

修理大夫顕季

とのまとたのまさりせはなかぬとも人をうしと思はまし

覚しらす

今出河院近衛

恨ても猶こそてふ我恋のさためつゝさはまくらひなきれは

貞和百首の哥めしけるついてに恋の御哥とて

よませ給ける

法皇御製

恨ても又誰やこゝまて人契る恨ところをといひてかくな

あらまそねなるひは恨そとなくさめてかる契と聞すとも

中園入道前太政大臣

恋の哥の中に

前大納言公蔭

うきことふかは中々に恨てなをのひかはあるへき

山階入道前左大臣

数ならぬ身はとりわき恨まてさめてうらみし恨みぬ程そ

源公信

わすれしと契りし恋をたのみきつ我からあさきそ今はうらみさ

文永七年八月十五夜内裏五首歌合

恨恋　前大納言為世

いと憂さにつらきそおもふ身にしあはれ人のつらさは

恋哥の中に　平親清女

うれしとも我世にかはらぬ乃月よりやいとゝしくらし

陽徳門院中将

我袖は涙の淵そおちまさる人のうきせとなりぬとも

寄枕恋　前大僧正禅助

よるは涙よこちね中へふるこさもしらぬ枕

題しらず　後深草院少将内侍

ゆめのまておもほえし昔に人の契りとたのみやかせし

伏見院御製

うき人のさ月をまつらんの恋はさもなかれはしてもかひしるへ

二品法親王覚助

太山木の下にふくとも乃下もみち残る色をまつ人とあき

中務卿宗尊親王家百首哥に恋

藤原基隆

よそせや竹の籬によりふ葛の下にふくしもうらみの色さと

寄葛恋　平親清女妹

秋風に吹きて萩の下露やうつみよあえず波なるらん

道智法師

今そとつま萩の原に秋風の恨を忘るるつるのこえ

光宣上人

いかなる人略のうきを吹きあえてとまる数のつり船

前左兵衛督忠兼

思ふこと是ぞあはれ秋のうちにつりする舟の

白河殿七百首うち寄髪恋

前大納言為家

玉ぐしいかなる神よりの見れば秋よりきき髪乃きるまとん

百首うち寄時寄夜恋

権大納言義俊

なつかしみ思ふ髪乃ゆふ夜ゆかるるしるしの

光信

今は為恨ましてはんとしてとひとせ

うらめしさ人の言せぬ夢はけまい

和泉式部

あのうらいかなる恨ぞうさえ恋ぬ髪乃

文ぬりつけ乃恨はあるのを思せず成

よるれも

源師光

はるかなるものとなるく拾遺和歌集巻第十六

恋の心を中に　よみ人しらず

つらとて拾遺と拾遺　帰るこゝろの　人の恋りけんこゝろい

はしとも拾遺　拾遺　中務　金仁親王

三重一のとれるく　中〳〵ふとゝ

月日とゝみさしま　拾遺滅院御製

新拾遺和歌集巻第十六

神祇部

神祇部の拾遺　はるかなる　はるい　春日神社　春日神社

はるい　春日　春日　春日　春日　春日

はの世　春日　春日　春日　春日　春日

静明法師　延暦寺　解部

もて　春日　春日　春日　春日　春日

春日　春日　春日　春日　春日

春日　春日　春日　春日　春日

毎年とゝなる年月とうきゝぬとハ打せぬ契いくたのまん
法印澄憎建久元年日吉大宮ハ千僧
供養の仏道導師ハ貴と仁和寺法恵
ゆゝしくて律師よめよ給きりハ海恵
律師よ為ふハ日吉へまいるへきゝゝや
ゝゝ年月をくり給けふ出ぬ
行きとなんん
おもふ我宿とゝ恨とゝうもてゝうゝ人よ忘れぬ
れハ樊西社ハのもて給きハ俗寶の
ハ給のとゝゝん

おもふあまつゝゝゝや白ふんん本系ゝりてたつゝ河あハ
亨五代ゝゝふ社ゝゝきゝ時立田山
ゝてゝゝ世給けゝ小鹿ハ鳴ゝゝん
延喜六年日吉社竟宴奇思兼神
河保雅賢
社祇ゝ中に　後二位家澄
思ゝ〇あハゝとせゝゝ世ゝゝ岩ゝゝ
ん世ゝゝゝすゝ神風やみゝゝ川の嘯ハ
大神宮ゝ合ゝ　源兼氏卿
神代ゝゝとせゝゝぬゝ川やゝ世ハ秋のゝ月

雲月神祇をよめる

法眼門院

くもりなき光ぞ八重と照らしそ神路の山の出る月をを

花園院御製

伝へきりはをはりたるその法の

伝へ行ありしはるかなりて後の

冷泉

春とや神の鏡もてみるとこそふるさとの月をも

大江廣秀

見しらす

くもりなきさしのぞみやぞ岩戸をひらきて神のみすゝ

正三位成國

ゆふ神の見けるやとりとてもあ鏡なるらん

源知行

あつらへもてもちやうやうの神のほとひ神ん

神祇官の中に　藤木田延季

神をいそのみすみるとは榊ちるあれ雪りの名さのあそら

津守國友

ちる時や榊の枝よりの神乃ゆきの玉ゆ

榊葉よ咲そふ色の玉ゆ神をんよりをてみるん

賀茂儀備久

清水脇清をめ行きの石清水社二千年

おなし寄水祝　　前大納言為家

神よゝや影ものとかに石清水すまむ千世まてなかき

三十首歌めしけるついてに社頭祝を

伏見院御製

石清水なかれの末をうけつきて幾世そすまん万代迄よ

神祇　　権中納言有光

のちのよをそ祈りかけこし山のはをまつ嶺の白雲

弘安元年百首歌めしける次に

亀山院御製

石清水神の心にまかせてや流の末をさしてすまさん

題しらす　　按察使資明

けふまても末世にあらん翁さひの尽せぬ松も神さひぬらし

惟宗光吉朝臣

石清水神代の月やかはるらん人の心を庭にうつらん

貞和二年百首歌奉りける時

関白前太政大臣

古宗なる春風よりのむしつめ風神さまれと祈りなん

元弘三年立后屏風に石清水臨時祭

後醍醐院御製

九重の様にうつしてしらは又神ふつくる雲のうへ人

前中納言親光

元氏の行幸なりしとけてたのしかりしかの
石清水ふるき流の行末まで我身ひとつに祈ふもの
法印幸清

あめ下治まりてまれなる世にあひぬ
賀茂遠久

ふるき世のことは代々神ふまつるやしろのあるかぎりは
賀茂経久

行末はこれ代々神ふまつるやしろのあるかぎりは
法印源源

年ゝ毎の我神の御祭に
宮月神祇
従二位敦久

ふるき代ゝ我ゝ世ゝ
平沙氏

等持院殿の大臣なりしかの新宮
そゝ
賀茂祐七
源和氏

いろいろ神を祭りとりてやしろにあつまるこゝ
祐氏祝
従二位氏久

我代ゝ
神の新宮に神やうん
神祇
藤原長俊

三笠山神のさて祈り申し奉らん

中臣祐強

春日殿の松を賞もおいのきり二葉ちそつ長き

貞和百そ年の時

前大納言強能

ちとせ経ぬ松と春日山神のしるしを仕り

春日社にこりて大和乃すいのりの中に

て思つけ給ひけり　三條入道お関白殿

みさ山に立すふり捨てそんさるの為に未来を

山路ちかく右大将よりて給ひとん

祝部成盤

ちとせ経ぬ昭を日吉乃神ちに又光そ秋の月

清水成運

祝部成親

祈申て神代とそ人ひえやをひえ乃松よりの白雲

祝部行親

あひよつのひて四りの日吉の松ふ七ち乃玉乃也

清水延全

神代ちりそ松を年四てそ長き之ち波

祝部成豊

なつ波ひとんぬひまを乃松とこそ松七の神乃

神祇官より中臣

前大納言為世

なりぬる神ふつまで墨なき日吉の社の神なる

よみ人しらず

神うちや蓋はまほうる光こそあまねく照せ撫でうれ

世中をうるすは神はいまは聖人ようて

なりけり

原雅朝卿

ひつとせとはてを見えてもなのはかをうるかを神なて

代をうるすは三山撫投は補しはこ

とをたしく

僧正良瑜

はつ[illegible]ちをみつまの神はあこそ身よあまりな

祝部行氏

神垣は代をきまれと神うこそ光はつうる撫しけま

三つ山は海ってしみ行きう

源人しらず

あやはの雲の白山は神はさたのこ神そ三つ見

前元百年生まりし神祇と

坂西園寺入道太政大臣

わうの浦は玉をうるつきはのり石と海りし神をうえ

前大納言為世卿玉津島社にて三合し行

けり河

津守國道

くもりなき光をそふる玉津嶋代々にもこえて神やうくらん

嘉応二年廣田社哥合を判しける時に
よみ侍ける　　皇太后宮大夫俊成

敷嶋やたえぬ道とも人ならは神はうけなん

題しらす　　伏見院御製

神やしる世のためとてそ身をも思ふ身のためにして世をは思はぬ

前大納言為家

みちの人杉の下葉に引しめはみまもるまつる道如し

従二位常昌

君か代をいのる心の誠をは偽らし神はうくらん

社頭祝　　内大臣

おさまれる人の心の道なれはかはらぬ御代とそまもるらん

題しらす　　三条入道左大臣

春日やかふる人神もこゝろにしるらん老木の松の千年ふる身を

権大納言義詮北野社にまうてけるに
社頭祝　　源直氏

我君の千代のためとや宮居して一夜の松もたねをまきけん

住吉に詣てゝよめる

伊勢大輔

なからへん世まても遠し住吉の岸に浪こす松の千世

後白河院御時やまとまさつりの伯耆
よりてよみ給ける　　権大納言隆季

後の世は八十路にてこそ人やはとはんみなとがわ
西行法師すすめ給ける百首のうち　　前中納言定家

うきことをなにはのあしのみをつくしあはでやはてんと
思へとや　　平政村朝臣

住吉の松はいまはむかしにあらねとも緑も幸八百年
西園寺入道前太政大臣住吉社に二千首

よみくわへてまつりける　　前大納言為家

君世ふる神の御代のあふぎの松
神祇　　お中納言為相

あまつ乙女ちとせをかけて住吉の社の
君の御代をいのる　　法印雲禅

君ぬのたまとみちとの御ぬさ
住吉社に合せり　　社頭祝

津守国平

君なれば玉とぬきてのぬさよりこそ光のとしをかけ

神楽と　小弁

ゆきたつる春の日かげのはるかにて神もぞ聞ん

さ神楽の音に和かなるこゝろ出へ乃ちはるの御

色もこゝろ　中務

新拾遺和歌集巻第十七

釋教哥

りんとしかしらの前にしたれる松みどりに春はむかしにかはらぬ

此ちかい住吉の社に詣して通夜して

侍けるに人乃夢に見ゆるあらたなる霊験

菩薩の御ことゝもん　法眼定為

比叡山の中堂にまいりて常灯をかゝけて

侍けるに　傳教大師

おもかゝる光をそへてかゝけしの光ぞ火

消ぬせにを行けるに粉河観音の現

後世頼ける時に　花山院御製

昔より風にしられぬ灯の光にはるる後の世のやみ

人の功徳つくりし所に権現のたまひけるとて　大貳三位

きえぬへき昔の人の灯にはふかきちかひをとりしるしせし

題しらす　慈覚大師

三のひをひとつ心と志りぬれは八十乃境にて直に成道

法花経序品　清少納言母

白毫の光に御らふにこそや細くて花とそ見えつらん

前大納言為家日吉社にて八講をこなひ

ひらきける時に人々に一品経歌よませけるに方便品　花山院入道前右大臣

春霞又世に出し秋の月おもむきは一つ心をとりきて

譬喩品　花山院内大臣

めくりきて松の戸のそそときくも嬉しき法の車

得未曽有非本所望　法印房観

たねてわか心ひにけりも吉野山桜に法の花の白雲

化城喩品従冥入於冥永不聞佛名　入道二品親王尊円

ふると

さ月やこの木の下みちにてきこえてきこゆる笛の音

採菊及菓蔬　前大納言忠良

凡本さうしの枕風にうつりうゑ神は家こそ乃人

勸杯歌　法二位行家

秋の月の庭まで照る月新しうつまで法を知る

酒出歌　前大納言資名

法の乳をしらう庭の時はまにそ白家は教そひけう

奏量歌　左衛門入道前内大臣

いまもなほとゝむなうは知とゝの心人乃心を雲そてうう

栗和貿直者則皆見我身乃人を

ゆうりうきこの乃ゆ新しあて二てしやとゝ山のゝ月

酒長功酒歌何況於法令　法眼源兼

水上と思そやまを岩河のうれも水乃ふきれ下つる

如寒者得火　寂蓮法師

岩の乃影乃嵐と志のきて法れ乃ふてあを嬉き

なき人とうふて法新きて歌乃

ふくと志ふふみ乃きに普門歌火境変

感池　中納言為友

なるべの別をしのばるる思ふ池のみとりに
母乃面あふ絶うきけり厳王尼しんと
前中納言定家
あたとなるべしたのむ祈の迷ひやとふらひよ
普賢菩薩心自宮罪福云々
寂然法師
何事の池乃しんもうして水もみなりの
小野 家たかの乃百れ様とあひく
こさてそその日接待つつり給つつみ
うたに
周防内侍
世をふるに天よりひれて
延久二年七月の日の
天使つかはしふみ給
法の水あたいかるる第七本しうの
文保百首元年
二月法親王覚助
法乃水海てやはるの山の井れふりやとれいふるまとを
二月法親王覚助
法乃水海てやはるの山の井れふりやとれいふるまとを
二月法親王覚助
二月法親王覚助

十如是乃心をよみ侍りし時如是縁

前大納言宗明

山河のをち遠こちなりとおもひそよ結ひしぬ契りそありけしらす

静仁法親王

絶えぬつきみ井のなかれと法の水月とやかてこそ遠

金剛経乃是法平等無有高下の心を

法印憲実

水底にうつるもおなし光そと空にしらるゝ秋の月

無量義経の四十余年未顕真実の心を

蓮覚法師

今そみる年つもりぬるのちにあらはさりしまことのひかりを

扇解脱風除世悩熱

法眼源忠

山のはの雲に入日のかくれても涼しくなりぬ松の下風

世尊不説々説迦葉不聞々聞之心
を

夢窓国師

いはましくふをとゝぬとのこときゝすして露人そなき

杖頭有眼

大無未審画義

うつそみのこゝろ法のとかれにも有りてくや松まかせん

象衛上人

消ぬとて家の命にあはむとすれば
法師のうさいなる房にとまりぬ
といとせーうらいとしかりてやいひ
うるおぼつかなそ　　赤染衛門
消ぬべきなのりをもよはぬるかな
二荒の権現王ときけり聖教をみく
とひつけ給ふ　　〈道親王詠る道
をしろふるこのやとてせやうけたまはるは
山伏ぶしそとみ給ふ中に物と
　　前僧正慈勝
ひろまるとなきなるはるあまれをそこれと
不倫盗戒と　　中務宮宗尊親王
ふなさまの風と山雲はれぬーあるはなきそふるん
延暦寺戒壇さに作て泥洹法親王
成をそこるひけるはひつきそ
　　法印源全
法の花昔ふるはよあひーとをうるぬをそこ
識実性の唯識ひんを　　前僧正隆通
うーあひの思をやめてさらーくのたをを心ふるとり

釋教の御哥の中に

後宇多院御製

梅花みよの佛のためしにもをりつる袖に人なとかめそ

一色一香無非中道

僧正慈能

色ゝも香もみなことはりのまことよりさくは心の花にそありける

善悪不二邪正一如乃心を

前大僧正云浣

よしあしもひとつ入江のことはりにかきにこりなき法の心を

世間相常住乃こゝろを

景性法師

世中は常とはみえて秋乃野のひらけん時を待そはかなき

悲しらす

欲子内親王

徒は又このよひとつにゆかされはいそて法の舟をとるかな

性厳法師

為に色皆のりの玉とゝひきて末の世かけてひきまもれ

よみ人しらす

おもかけの流をうけて欲の世のりの玉をまもれかし

般舟讃一到彼國元来是我法王

家の心を

雙救上人

はな文字のこゑをましく絶句とせば昔の翁の歌の部よりも

題しらず　権僧正良仲

みちしるべの水の庭さへ八重にもさくもの之蓮葉

九品往生乃心を　慈空上人

よしあしの人とわけて花ちりて九品まで咲くらめ

名留半座乗花葉待我閻浮同行人

法印能経

身のむすびはちすの人と契りてし蓮の花のうてなと

題しらず　よみ人しらず

心をも移すや見えん蓮葉の露の身までも法はあらはつ

仁明天皇御製

世の中はいとふとも無くきよければ我身ならん

（権）少僧都源信

うきひとつ身をこそふかうなくことなむ身なれ

五神通乃中に天耳通の心を

参議雅経

ことはりも移しまし何ごころ思ふくさの身なし

弥勒を　前大僧正澄弁

なかき夜の暁をまつ月影は末の雲にかかるもの

釈教乃中に　前大僧正桓守

さすらはるこのたびに法のやまと照らす法の月かげ
十住心乃中ふ学えん不生心乃こゝろを
法の守遍
法流乃ゆ勅願よつてさて養ゝ作時れ
ひいつを結けり
法界神性智のんと
後法性ち人道お置百姓長
ゆゝはるさひよりる人ハそれらやそはりかれ
ゆゝはるさひよりる人ハそれらやそはりかれ

沙羅林を
梢ちへたのむ色をふゝ枯よりあれはあ
色ふゝ丈六乃仏を絵ちりて 信長出そ
てゝあり

宗法院御製

ゆゝの寂乃林ゆゝさと思ひゝふて長ふり者ろ
禅波羅密

膳西上人

心をゝんの庭よおゝあゝそゝちりとゝゝ庭の上郎
板東板橋政前左政大臣

秋散奇ゝゝみけりゝ

慈威上人

義ふゝ六十代光とふゝ
ふゝちはあねはゝ

心の常の業に流通種子を付けける方

心海上人

年来の所望の種子の事に長き眠をおどろかすべき

清水寺と異隠し給て坂本寺領とする

前大僧正良信

とうとうや法の船に乗そえて乃ち彼岸に

地蔵菩薩と

変改上人

西へとも月はいづくの里ぞとて地蔵の名号をとくしめしたまふ六首の内

為道和尚

契あるにはうき身なりけるとて世を厭ひ道

出御門院御製

西の月はいづくの里にあるとて浮世中に移り住ぬるかな

天台座主澄源

西へとや出る門とて極楽の月花松尾を歌せられ

坂境滅院御製

雲まより出さう月はあるとてそなたに向ふ

義福院法皇御歌

楽に向ひ給ひ

なるべくに来乃ぬるひ

みくまの中納言よりうた

皇太后宮大夫俊成

海さ[illegible]の光を[illegible]三[illegible]みくまの月のこころをしるやうみそ[illegible]

寂蓮阿のこと　前大僧正慈鎮

一むらの[illegible]を[illegible]雲晴てさらぬ[illegible]すむ月の

心月梅のこと　お[illegible]大僧正良[illegible]

月[illegible]ぬ[illegible]の月[illegible]ら[illegible]ふ[illegible]むそさ[illegible]

業[illegible]海の我[illegible]自心[illegible]月梅と

惟[illegible]上人

[illegible]みの[illegible]月そ[illegible]

前大僧正慈[illegible]法流のこと

[illegible]みの[illegible]

權僧正寛伊

[illegible]ぬ[illegible]法の[illegible]

お大僧正恒豪　大僧都慈[illegible]灌頂さ[illegible]

を[illegible]みの[illegible]

入道親王尊[illegible]道

[illegible]

返[illegible]

[illegible]の[illegible]

前大僧正恒豪

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

岡本前関白太政大臣

今さらに浪よるとしの杖なれはなにさためむのりは
くもゐよりまかりありけるにこそ所
より扇よそへて物を入てかへしせられけ
るとし

和泉式部

いつはりとおもふもさすか物ゆへにまたなかに
ひとふしのそ

新拾遺和歌集巻第十八

雑歌上

早春霞を

後一条前関白左大臣

あまの原のとかにかすむ春の日もまつたちそむる霞哉
見しらす

読人不知

相坂の関に鶯もさえつるにこそ越えてとゝめん

御障子の絵に山に鶯聞人あり

忠見

鶯のなくねをきけは山ふかみ我よりさきに春はきにけり

鶯を

後京極摂政太政大臣

[illegible]

春雪

民部卿為明

雪さえて色変はらぬ松の葉のゆき見ぬ花の春のあけぼの

早雪乃ふるとしもなき花の枝に

順徳院御製

風ふきぬ梅の花の末ゑだ折てそらさえさゆる雪の夕暮

聖雪ふるいとゞ

入道二品親王尊円

聖人のまこと雪にまがふらん花ぞ春をしるべ

[illegible]

源時秀

山陰に残る雪さむき白雪の消ぬうちにはよそふ色かな

前元百首

[illegible]

前大納言為世

あさぼらけ[illegible]雪風よりとゝもふさ梅ぞ[illegible]

中務卿宗尊親王家百首歌

典侍為家朝臣

[illegible]

梅の花

[illegible]

寄雪法師

[illegible]

正二位成国

なまてらさ[illegible]の[illegible]と[illegible]へ[illegible]や[illegible]ちさふ[illegible]の[illegible]ん

道助法親王家五十首ニよる遠帰花

参議雅経

家ゝ[illegible]ものめをとろかす[illegible]と[illegible]ゆふ[illegible]

法眼宗信

老らくの波よりうる[illegible]月を昔やこひしとうん

石清水社奇合ニよる月前霞

正二位知家

よこ雲ハ[illegible]よわるる山[illegible]の[illegible]神よのこる月か

百[illegible]中に

花園院御製

[illegible]ゝ[illegible]の縁を[illegible]ゝ家ゝ[illegible]ひら[illegible]

左兵衛督基氏

[illegible]

春の[illegible]の中に

法皇御製

[illegible]生ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]の家[illegible]ゝ[illegible]世のゝ[illegible]

百[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

前中納言有光

[illegible]

この[illegible]

参議法師

ふる里の春をみかきは八重桜さかりなるらむとこそおもへ
題しらず　　読人不知
きえ残る花をちりてもまたおもへは惜
年をへて此庭の花をみんとく
夢窓国師
七十路の春まてなからへてことしもまた此花をみるかな
亭子院の歌合に
藤原興風
身のうさをいはまほしけれはちるはなを人にしられてや散らん
題しらず
清原元輔
君まさでちよとこそみめ山桜なをよそにて家つとにせん
二品法親王覚助
春風の吹すさふには梢にもまた咲ける花やちる覧
前大納言公蔭
桜花ちりしはまたかと又咲つゝ庭の春かな
藤原基名
山里は花ちりゆくの春をしらすとひこんとか
弘安八年八月十五夜三十首歌に
落花埋庭
前大納言為兼
庭の面は跡みえぬまて吹風にちりつもりつゝ花の雪

弁官の時こゝろざしてけるあ
ひだ山ぢをこえもて行とて
梅宗使資時
雲の立ち乃中に
八条入道内大臣
嵐ふきそはるこゝの雲日山未来乃春をまちひらけて
雲雲はれんと
読人不知
徒よりんとのこゝろをこめて乃家乃雲を去てこゝあり
小侍従
月ふかり年は雲るを西さらとをりふかりあり雲は慣さ
源和義朝臣

こゝろあるとて雲り雲は雲はるを松小もはらは
陸正平邦省親王家将
時をまつふんそこゝりあり雲乃雲はこゝあるこゝ
坂猪熊前関白太政
君をとゝ一般はかりこゝすれのこゝをあるふるこゝ
伯郎左とゝふこゝとゝまの世はけり
院御歌
短歌とゝよあるこゝ時をこゝ一般乃初春まつて
光ゝ
僧正恒覚
いつこゝふこゝ雲はは時をはるなるあ雲はこゝあるけまて

後鄙云　　三善資連

業務をたてまつれえの所望あり枕草子作るむん

堀川院御所百首をよみてまいりけるに所望

基俊

一部の百首の内に所望のことなれば接ねをそすす

文保三年百首奇事なりけり御

中納言為藤

りてあるべきことなれば鄙云今一部八雲さらりて

洞院摂政家百首をよみてまいり

道二位家隆

鄙云ゝ小倉山のさとをあれば和歌所ゝ

時鳥と　　清水　宣為

今を盛りまつまちかりの所望あり月の光たのめて

ゆ〻しらす　　嚴安門院一条

鄙云宣為あつさ月に移ふきの無尾ねをあく

卯月五月　　前中納言定家

玉あやめとゝろの形のおやめ第五月雨ふるゝ所しくそ

五月雨ゝを　　院御歌

山ふゝ雲まなかれしく雲ゝ雲ゝ月雨の光

左近中将基為母

なのつゝいつゝ雲まより月新もみゝそゝとゝ五月雨乃そ

夏はこゝ中に　伊勢院御製

あゝ山乃岸とゝゆゝ行こゝ翠よゝ分あり山の月

二月は親王兄弟家五十そゝゝよ稚川

津守國冬

ことゆゝたゝなゝゝ乃ゝゝ山ゝゝ乃ゝゝ春ゝゝ待

友弟と　藤原顯宣卿

いゝふせん家ゝふゝまゝて友の親とゝみゝゝ庭乃夏菊

百首ゝめゝゝし一つゝゝふ見ゝゝ

御製

友弟とゝゝゝ

文保百首奉献中に

坂光明照院前関白

鳴蝉の聲ゝ[illegible]

[illegible]

入日うとき森の下葉より[illegible]

僧正覚信

夕立の晴ゆく空のいとさやかに月入新てすゝき

源時朝

日[illegible]の山陰の涼しき風を物ゝ[illegible]

橋後徳[illegible]

晩涼秋ゝ

[illegible]

秋ゝ中に

法皇御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

坂深草院弁内侍

[illegible]

[illegible]

秋の夕とて

権律師紀尭

嵐吹き散る木の葉の音もいとゞ心ぼそくなる

貞和百首歌よみ侍りける

前大納言経親

まばらに残る村雨の間をいそぐ人つま近く永

嵐の山ふもとにてよみ侍りける

安法法師

寂しさは山のみねの雲の袖にあらぬ

光ばかり

左近大将師良

吹きまさる風のやどりは萩の葉の秋の暮

光明峯寺入道太政大臣家百首歌より夕萩

従二位家澄

彩ちるさ山下萩の葉ごとに夕日ぞ残る村雨

百首歌よりしぐれ

入道二品親王尭恵

うへをさ彩る木の葉と吹風よ色ぞ染めぬ秋の

秋の歌の中に

権律師宗基

ねやちかく吹きぬる風の音ぞ重ねて寒き鶴

永福門院

村雨はる〻夕日の影ぞ残りて木の下陰さ寒の色か

祝部成任

源守法親王

よみ人不知

惠宣上人

伊勢

[illegible]

[illegible]

伊勢大輔

[illegible]

安陪宗時朝臣

[illegible]

[illegible]

二月法親王道助家五十首ノ内ニ萩露

絶二位家澄

咲ちるを聖もうしの花ぬれ菜もあらぬ小萩もぬれる

秋の露ぬれそめにけり　法印澄弁

萩の葉にうつりふる白露よりぬれぬ袖のなをうらまれて

平常房

久方の下葉をけて秋萩の葉のみさらりそめ

権中納言兼博　家歌風可

貫之

秋の露中に　源氏法印

白雲のたちまちとぶ秋の田の穂波をなびくかぜ

菅山麻ノ

陽正平親王

白雲のたちまちとぶ山の麻そなるかな

祝部尚長

秋の山の麻ぬの麻ぬ

秋の山の麻ぬ

山蘭と　　定照法師

小倉山みち吹おろす木枯よ　　中務

秋の言とて

人恋しと秋乃下ゐ[illegible]

[illegible]

祝部忠成

道助法親王家五十首ゟ　嘘蘭

蘭の秋ハ[illegible]

秋乃ゆゝ

従二位行能

花園院御製

[illegible]

永仁元年八月十五夜住吉多賀ゟ十

[illegible]

前大納言俊定

八重葎茂る庭ゟ鳴虫の[illegible]

[illegible]

ゟみ人不知

[illegible]

源宣嗣

[illegible]

前大納言為世

[illegible]

百[illegible]河　前大納言[illegible]

夕日影雲のうへにふるひかり月待ちの空そらのさ

石清水社[illegible]合は秋の月

衣笠内大臣

松風の吹[illegible]ちらす[illegible]の原の月[illegible]

影ゆとさしてりて[illegible]

[illegible]

[illegible]

辨内侍

[illegible]は[illegible]月や[illegible]山[illegible]の[illegible]

秋の[illegible]中に

[illegible]

秋かぜ[illegible]富[illegible]の[illegible]

月のうへて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うてはなを月にたれこめて中くれはのあそみうき
貞和百首に寄月恋
厳安院小宰相
世の秋はかりをさしのぼるとは月新しきあの雁
月をなかめ
道淵
はるかなる海はるかなる山里は庭白雲のよそにうつる月かな
百首うたの時
民部卿為明
玉鬘の月まちそめし夕ゆふつけをうつしの時やうつる
家に寄合
伯けつ
平宣文
雲のうち照やまはりと水清き空ふかくとうん秋の月
石山にこりつまりて伯きりとうつるあり
藤原孝標朝臣女
苔河のうつるとは海とうつりて海の月
伊勢
伊勢につてふ
伯けつ
日つらつきの
七条后
月はうつりかはれとも人とうつて波よりあれそひて海
影しらす
宮内卿重茂
久しの月のうつれはみなの業はうつるとはあれて海
大江雅親

秋のよもをてわたる村雲に西へ〳〵と海の月

百首うたよみしに時月

等持院殿御歌

春のうらゝとそさく月影のうつるかゝみ岩ねの嵐

前大僧正

源宗氏

松をはく嵐の音とさわぐ時なほうつる月をそ見

月前遠情とゝふしるを

小侍従

いとゝまたあらしの音もきこまて西の方よりかゝる

月をしるかな

前中納言宣資

春日野やうすゝ霞の月の影まつやおとゝ乃松風

よみ人しらず

秋のすゝ霞の光とみるかなり玉のゝ上の秋の月

野月と

雅成親王

高城の木下露やあらしの音にまつ物の月

前大納言光雅家百首歌

月十首うち

内侍

なかめつゝ思ひ出やとゝ月いやとゝ昔の恋をのこして

光俊

源雅遠

袖ふれ家のうらのあまとを見ぬ月やみた

関白前太政大臣家より色紙をさつりて詠ませ給けるふ海月　前参議為秀

ふきすさむ月をそなたの海のうへにさしてあきなる夜の嵐

湖月入くを　　坂二条院御製

ふるの浦やおきてけて秋風の吹しほうふ月かけ

元弘二年八月十五夜人々のことを部

とさつりて月の前にすみ侍りし月前

雪　　友原為冬卿

空まつ雲の川雪をひまなくて月は秋風を吹

貞和百首の内なりし時

雪　　等持院贈左大臣

雪ふる松の風ふかるらん月かけ

さえ　らす

明ぬとも物すさまを生ぬ月は秋

平宗宗

なつかしき和を明ぬ月しかな鴨の音をあ月新

伏見院三十首の中に

ひかりあり月さへくもる雲なくば　　永福門院

題不知

ひかりあり月さへくもる雲なくば　　式子内親王

[illegible]

正二位藤原

文保三年百ヶ[illegible]

権中納言為藤

うきよの限りもあはれ[illegible]

秋の[illegible]中に　侍従[illegible]

[illegible]

元弘三年九月十三日関東[illegible]

[illegible]　侍従藤朝

[illegible]

正和五年九月十三日[illegible]

[illegible]　前大納言為定

月[illegible]

[illegible]　侍従中[illegible]

[illegible]

[illegible]

二条[illegible]

うりはまう紅の葉ふかく秋乃日数経るとみえれ

花園院信子たまはりけるに十月廿

日明恵房へ紅葉ある人のもとへ

葉と歌のふるまひ入てまつり世話けり

伏見院御製

色そへん山葉とそてもの歌をふりあり宿の庭の葉

返し

花園院御製

歌のこゝ様をいとかしこくみるに庭の紅葉

紅葉と

入道二品親王尊円

家ちりの色をとゝめてみるあり紅葉ふ

山姫のてをあふいそくもみちはあらされ綿ぬ

建長六年九月十三夜五首歌

初紅葉と云ことを

左宰相中将為経

山ひめのいそく袖の色と深りあらし歌りみち

十首歌

せ名ふけり

摂政前関院御製

又別日三首てのうち山乃ふもと雲よ積風そふく

百首歌

前参議実名

今宵あらそふそらつゆ小倉山のゝみちは紅葉ちりしき
宇治入道前関白内大臣家百首歌よみ侍りけるに
こゝろをつくしけり　堀河右大臣
いふてあはしとをもふこゝろあらんかたをしたにそ
延喜七年大井河にて紅葉の時序題
まつりて冷秋水とふことを
貫之
波のうへに漕つゆをしらぬ嵐にはあらしの末葉ちるらん
仮醍醐院より十首うためしに寄月嘯
とふらとを　前大納言実教
打とけぬ月はあらしの思ひてや紅葉はゆくえ
菊秋霜
前大納言為兼
うつろふ時の花の神はあらしをもとゝ紅葉
寛治二年百首うたまつりけるに初冬時雨
冷泉前太政大臣
晴ぬとは雨ふりそへてうつる雲の橋のうへにはあられ
鄙一年
禅信法師
山風はあらしの雲の沈まてしもとゝ紅葉ありあけの月
友平後鳥羽院
神無月しぐれ降ぬ紅葉はいとゝ色ふかくなる時雨かな

百首うたよみし時 藤葉

前大納言雅房

ぬしなきかきねにさくはなの香をとめてやとまるうぐひす

殺生つかさ

秋の月さやかなるをみてよめる

前内大臣

大内山をのがれぬるかりさそふ嵐の山をみちてけり

権中納言兼輔家屏風

貫之

野邊にいなるる時は白露のあらはれそうるあらはれ

高市黒人

ひさかたのあまのかぐやまとしもすがらなにをかかりけむ

平時常

文保百首うたよみし時

坂西園寺入道太政大臣

伊勢の海や海風そふく濱荻の葉にかぢをかけさしよりて

冬乃宮内中に

聖護院宮

難波江や葦のかりねのあしまくらとまをあらしのなかにてそきく

大江忠房

冬梅のまばらや京の小出し　西鶴みちて花ひらく梅

百ぐりもまりしの河童茶

入道二品親王義尚

風さゆる梅の難波に花落て　人あふなまくらん

冬月乃雪とて　等持院殿

梅ふる梅の小藻ちるさくら月も白雪ちる

冬雪とふるとて　院御製

冬梅ちるさくら色ハ梅花　西の梅ちる

春山殿の雪ぞ奇りける

前大納言雅継

冬梅の月梅さくら花ちる　春乃月

二品法親王義助家五十首ノ内冬梅月

梅中納言為爲

春さくらはなの波かりやて　神ちるる春乃月

影ーらす　宗久法師

梅ちるハ竹のひとしの水乃　おもる宮そ河水ける

百ぐりもてまりけるふる水

四大臣

乃えまぢる風ちる春乃　春門乃月

滝水と　花原長秀

吉野川あさ[illegible]ものを山風やはらぐまもなし

[illegible]

[illegible]の[illegible]しけさ月よ数みえて[illegible]深[illegible]

百[illegible]なりし時分

梅窠使実継

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

前大納言公蔭

[illegible]の中に

[illegible]の[illegible]

[illegible]

河[illegible]

[illegible]

[illegible]

みちのくの柏葉の家やおもふらん源の月ぞ宮ぎの
百ぢまりしの千鳥　　権大納言義詮

ぞ和歌浦の関もるものを月ぞ宮ぎの
亭子院の合ふたの方よりへの内にせおり
て右頭女七のみこうの月ぞ宮ぎの
めしく　　亭子院御歌

立ちかへりあふぎの風ゆゑのこしてかりのこ
伏見院よりきりけるを年を重ねて
　　延政門院彰大納言

渡てふ家の名ぞ作りそをひめ君に友作りそ
網代引友とふるものと
　　道阿法師

あしたと契しのまくこめとつこになりて日と言ふ
書物とあり　　源氏物
澄言にとこの月ぞ宮ぎの
　　源彦氏
冬ごもれ中に
言にのこ物とふけて玉作りよなまこにちる雪
　　権律師則祐
柏のこ葉に雪乃一むら

[illegible]

前参議教有

[illegible]

源頼澄

[illegible]

初雪乃和歌等拾遺抄に見へたり

[illegible]

夢窓國師

[illegible]

源宗氏

[illegible]

[illegible]

坂醍醐院女房人百代

[illegible]

惟賢上人

[illegible]

友東盛法

[illegible]

[illegible]

前関白左大臣道家

[illegible]

友東為重朝臣

うきよ[illegible]の[illegible]をは[illegible]て[illegible]みさとらむ[illegible]

花宮上人

[illegible]

いとゝ[illegible]世とゝふ[illegible]ひあり[illegible]

大納言経信卿

うきてつゝ[illegible]

加賀[illegible]清門

[illegible]

大納言経信

返し

富士のねふ[illegible]つむ[illegible]

百[illegible]

前大納言忠季

[illegible]

等持院贈[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伏見院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千五百番歌合

野宮左大臣

秋年をあらしの山のもみぢ葉はおなじ色にぞ人も見るらん

新拾遺和歌集巻第十九

雜歌中

百首うめさしの暁鶏　御製

とこやまのあらしにおくるさけの声ふるさと遠く聞ゆなり

後鳥羽院御製

ながめつる雲のかたちもいかばかりあはれ知るらん月の光

前大納言為兼

ながめつる花のはるかぜ吹ぬれば心ぞとまるとこやまの

[illegible]

源氏物語

[illegible]

[illegible]

二条院親王[illegible]助

[illegible]

前中納言定家

[illegible]

伝内朝臣

[illegible]

前大僧正[illegible]

[illegible]

三十首[illegible]

[illegible]

花園院御製

[illegible]

百[illegible]

御製

[illegible]

保延元年内裏歌合に海上遠望

按察使公通

海はるかなるかすみのうへまで雲にうかぶ沖の船

平泰時朝臣

春なりのかすみまでこそ海ちかくなれ

春元百首より

法印定為

富士の根を面白くみるは海ちかくかすみ晴れぬ春の

法皇御製

ちぢの海雲吹ぬ風に晴てまちえん遠の山のい

春元百首より

ほけつ沖より松

長山院御製

遠山の花にとまれる我なれば年ぞ行かぬ

大僧正慈円

今はわれ花さき発の枝ごとに又ふりぬる身ぞ

前大僧正道昭

雲ゐ沖おとはる雲の苔莚いく世ぬれぬ

法理大夫彦季

世をもてそぬれぬと伝山の月に沖よりぬ

お大納言実教

天台座主忠尊僧正の歳くれぬる法
勝寺なりぬとこそきて侍ふつるけり

祝部成仲

思ふこと信のあるべきかはいふ心乃ひかりの光とそみる

前参議為秀卿の家にまゐりて侍ふ法華経
懐とりつるんと侍ふ　友朗為邦

信心まこと稚児の信よりあてわつのうるへきたいそす
清浦勅使四位にして侍ふ法ふつるけり

左宰相武宣家

むしろの為業乃家ふゆゆ国てそ姫うりけま

うしなりたまふりて侍ふ又義人ようりあ侍
けりけりあり　友朗平邦

たるくいあもの家乃色ふるいて雲乃よ立つ山ま
百ふ侍ふこの中に寄とうま世侍けり

月花門院

あふひるる家とそこそ侍ふよ交て雲井にとそたつの一
乃ふ百ふ奇めりけり次ふり

慈円

慈円ふ侍ふ法みちしふ世侍ま乃濁よあふ家乃
忠見清の家ふ侍ふ法すと法つめて侍けり

順徳院御製

よおやけさこめて先ゝ仰られける
まいりて仰きつけめゝあつとゝ申給に
ゝゝ作ゝまけり　天暦御製
みとを雅なゝ流のようそうはゝ
忠見
返し
仰ゝ拍ゝ初のふゝとうみちはゝ高ゝみなゝうりきん
応和二年一宮奇合り
読人不知
男乃浦ゝ波の上ゝ戒神よ面とゝんゝ為さゝ
文保三年百ゝ三ゝなりけり時

前大納言為世
立ゝわかゝ波の世代ゝ老てこひ為ゝ
恋しらす
吾源法師
おゝ流たゝの渕乃ゝ高ゝ風ゝ和やさむゝ為ゝ
貞和百ゝ三ゝめされし時
中務卿宮家母
加ゝ流ゝ百ゝ老乃みゝ世川ゝやゝ
題不知
後鳥羽院御製
乗ゝ山乃嶺ゝ雲ゝ
貞和百ゝ

わたりする河をも舟よりたとへ竿をそのたりうをとるを

河と　　後鳥羽院

大井川みなかみにはうまくいふちに舟むすぶ筏のもとすみやか

急流は流れしてせゆくとて立田山をこえんにはを行けり日たくれぬ　行くれて

亭子院御製

世中にいとひなりて立田川見るふ流をあはとふりけり

前関白

彩しらす

ふるえん関入ぬ川いかるまい立つむらを世よりもとうにん

おもふ人宿してまつ

平兼盛

石ゐるち出ていつこそむとふ昔を思ふ事やうきん

なとなりの流ふくまあり

能因法師

新人さうぬいるさとふ流とふ飛ふひとりあ考ん

大井ゐるに舟きとふ石とも園院へ重

て行ゐくなりとふりやさてみよ海りて

西海深出ていまさふふとともとうき考ん行り

とひ出ていまく

西行法師

いまさらふるさとと思ふ流つきせぬ春の行末は昔忘れん

祝部成久

ながらへすまさつるこの流しるあるべき代々あふぎ川の名を残さん

命ののこれるうちて又二結ぶ玉ぐしにて心の中

ふたひつを結ぶうち　法印定為

みなせをとこうるかさえあるべきみなと川の水に白波

世をあけて世を待ちて　三条院御製

はるくとうさ世よりもそふ行のつまをあさいろうを

百ぐさ今年りしに対庭竹

右大臣

竹をとめの風をと吹あえと十代おもりみをあらく庭に美竹

正三位有範

美竹の代代乃美まつへさねとひてのこす一枝ふ

前中納言為相

もろさと友とふとしと美竹のさ枝ひとり分まを数ふ

従二位家澄

五百番に可合り

なりへてあまいそ乃つ美代代数ふすとも身を思ふ

前元百ぐさ今年りしに対述懐

坂中納言大臣

後醍醐院御文稱のうちくなりて坂
宇西院西園寺よりはるばるふたうまの
つてをあり

六条内大臣

老らくはたゝうきまてしつゝへさて老のみゆきふる雪の姿
弘長元年百首うたよみけり河逍懐

前大納言為家

つゝへつゝ老のそゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)

安時の比の光とゆるくしれる中にみをもつ玉をたゝうる和

弘安元年百首に月をよめりける

前大納言為氏

なの枝にうすくこゝろすつゝそてとをあつひしやまのはとゝめて

貞和百首に月をよめりける時

等持院殿御百首

いまゝでの月こゝろとゆるゝへとも人をとをくとうつゝそてをしきの

月の宮とそうつゝあつ

中納言為藤

三笠山そのゝとをけてみ和をとゝうふ波の影の月か

弘安百首に月をよめりける時

前大納言為氏

めつらしく雲のはの月よりくもひゝうをそ花をとゝふん

後二位花下八月十五夜よ任紀とけ給時

よみ給ける

お開白たゝ居を来

こゝ心を先ゝゝゝ伝山ふゝひゝ秋の月をみゝれ

義人ゝて給けゝゝ哥ゝ

後京極

伝山の月ゝ我身ゝいゝゝ雲ゝ月よゝをゝゝ

貞和百首に月をよめりける時

前中納言雅孝

ふるひとそ五代とこえぬ位山ゆかしのかゝ
ぬ一ふす

八条入道内大臣

二代まてそうきつゝ見ると我ちゝみとあつく八十身をつゝ
ぬ

坂中院内大臣

七十八にて神よりやうきて老とゝ月そいとはしけ
ゝ

法印長舜

年のまり隠家月とゝ月とゝ老の程をとゝ
家は五十首ゝ

陽成院親王

月入さしのくさむらをとゝ仕よるゝ山ゝ月ゝ
月入ゝ中に

前大納言為氏

なのつゝ初とゝ人をなくさあと海は秋の月やもん
人の家は女とも乃月見けゝ而て

恵法法師

我宿乃初とゝにみゝ妹のよ月はとゝ人は海
弘安百ゝ年ゝ

前右兵衛督為家

わゝ乃海は三つゝそは上て丹をとゝ人ゝ世ゝ山ゝて
宮第述懐

源成貞卿

りて茅ぶきなる御堂にて御ものがたりの
竹林院入道左大臣いまは右大臣よりの御
こゝろ御製とあまたゝびのそうして毋屋
けうかく
伏見院御製
ひさしかるべきものゝかたりすいかんの形見とも
はかなしともいふべき巻物のおもしろ
拾二条院御製
秋の世はなりぬるかぜにあはれいまはの草の露の
文和三年十一月大嘗会惣紀方の歌
さゝて代々の古年とゝのへて
拾二位の忠
人の手をうせけりとなん雅そなへけ
もとゝもに仕へしかたくふるき
大納言雅信
雅つねの宿のつまとゝもにうなくなる
扇風の絵よ彩の本あり歌よ人をうして
ひかりふむこゝろ
読人しらず
ふしく宿よりして梓ちうとんかとなるまあ

右近大将道綱母小うしそあそひ
けつかはしてやはらかなる書
贈法師
はらからのあまとなりにしかはあるよりはかなき
道命法師
返し
あつさゆみはるしまとおもふあまくものたえまにさえてつきをまちけり
貞和二年百首歌よみけるとき
中園入道おほきおとゝ
五月雨のはつかへてふるさとのやまかけとしてみけり
山家月
前大僧正実伊
高野の尾上ふるゆき松のかゆ毎の世とつゝとはるらん
述懐歌
中園入道おほきおとゝ
ゆゝしきかなるつまとあるさとの月
百首歌よみけるとき
平貞秀
山家
中園入道おほきおとゝ
あはれなるこもりて住ふるさとにみしの雲そてつゝ
山のかりて侍
戒秋法師
雲ふかくて木たちさかりなる物ふるさと世とそもて秋分今
神林寺ゆゝ郭公とゝきて

前律師永歌

惟宗行房

お大僧正慈快

法皇御製

法皇御製

弘長百首

前大納言為家

建仁三年八幡宮歌合

坂上明院御製

友家卿

法皇御製

あさぼらけ有明の月にそらもみや山ふかき雪の八重の雲はらひ

山ふかくすみ侘ぬる人のうらぶれひさしてはる

けふ来ぬる

藤原為光

山桜ちる木の葉の家とおもへばこれも消ぬるうたかた

ちる人ふる雨

藤原為家

俗なれぬ山の嵐の吹ひさしもあるべき山の奥

法印尋清

暮ぬ山の杉の下風吹ぬれば世のうきことやうるおぼえん

出家法師

つゆ深き山のからぬ袖ぬれて人の問ふにぬるる涙

山家にて

桜宗使乙敏

問人のあるにまぎれ山里は世をそむくとはなるなりけり

源頼氏

人ふる程をこそ山里にすみのぼるこそ遠ざかる通路

源頼仲

こぼれ出せく入は人の問ふにぬる山の杉の

洞院摂政家百首

藤原雅経卿

ぬる夢ぬる夢書ぬる堂に問人のいまのけを

東山なる所にてみ侍る

前大僧正[illegible]

[illegible]

法印禅守

[illegible]

法印禅澄

[illegible]

友京朝村

[illegible]

僧正極[illegible]

[illegible]

二品法親王[illegible]

[illegible]

大納言[illegible]実母

[illegible]

[illegible]師

[illegible]

前大僧正頼仲

ながらへてまたとゝへい七十あまりけるさ我滅の秋

お大納言殿

徒よりいとけなく去月登ふりの人ゝ多き森の下葉

述懐の心中に　大僧正忠快

いつまでとゝふよつきて老の身はなくさむかのおもひ

浪あとに月ゆくさとゝも知ぬ老とゝ人ゝ話ふ

いふせんとゝひ世中はあるとうり老身を老ぬ

法印長舜

老後述懐とゝふを　陽正子邦前親王

いつまでと世とゝふすると祇ぬまて老の恩を滅へ者

光宣上人

ひろやかの世ふけて徒よりをもやぬ法のり夫

法印淳深

後の世はやこゝろけよあつめても月をてゝさね愛とも

藤原成藤

つゆよりはかりとも忘れに老ともむ雪もるのか

述懐の心に　源光正

[illegible]

宗祐法師

[illegible]

[illegible]

源三位實遠

[illegible]

河

一條大納言

[illegible]

三善為信

[illegible]

貞和百首[illegible]

[illegible]

入道二品親王法守

寄橋述懷

[illegible]

藤原宗遠

[illegible]

永福門院内侍

[illegible]

源為氏

[illegible]

述懷

藤原雅朝卿

[illegible]

三位法師

いさゝか世をもしらぬ身とは我ゝ知そおもふ

法印尭孝

ありつゝ世をこそいとはゝ数ならぬ身は何をかうらまん

惟宗忠京

世中をうきものとのみ思ふ身はなにをかうらまん

法印通宣

うき世をいとひそめてもうらゝ数ならぬ身とわるまじ

述懐

みなけふ

平政村卿

世をうきものとのみ思ひそめ身は世をうらむるなるらん

二位法師

うき世をいとひそめぬ身ゝふるのさゝあみ

世をうきものとのみ思ひ捨身のうれはるまゝ

信生法師

ひとふのいとひそめてもふる世をうらむるなるらん

法印

なをうきものとのみ思ひ捨身は世をうらむるなるらん

津守國助

実房述懐

権少僧都行厳

思ひ捨おもふ世を義とをりてもひるの行

為朋友のうみ給へるをゆめのごとふしをがみてやうかい

源和義朝臣

誰をかはまことの友とたのまんまことの友の世をはなれぬる

源義高朝臣

二月法親王の御所にて家五十首の内述懷

従二位經平

立かへり春をまつ世の中はさいはひそとはいふなりけり

按察大納言御家

月ゆへ

はるの夜のあはれ知顔の月やらん春はあけぬる世とは

法皇御製

うきを忘うらみぬもつれなの世をなにさもむつ我をかな

よみ人しらず

春の夜の月日はいつとさだめぬ昔とかりにかすみ

前僧正雲雅

夢のうちにはかなくさとりあるべきを

山田法師

春なりとうえそめしをこの世にはあらぬ人

賀茂基久

うきはとてよをあふをとはなれぬ海世を捨ぬ

大江為廣

拾遺そ我くりそいてくらひ世とうしのこ恋こさあん

普賢法師

あまはふいふふ今をやとも世と思ふとて拾や遺

前参議長良

恋

ふるさとを思ひぬ古と二ものひみるふ恋ふ恋ふ

懐舊のこころとあり

法三位宣子

ふりにしなふ恋ふふ人数ふて昔思ふ三河の生き来

兼空上人

うき世ふふさむふふふふ思ひ思ふふ恋とふ人ふふ

法中原意

恋ふふふ世ふふ昔とふひふぬ恋ふふ恋ふ恋ふ格

郁子

源義春

我ふふふやふふふふふふふふふ昔とふ三の下

道昌法師

古とさふふふそそ思ふふふわふ恋ふ海世ぬん

平英時よとふふふてみふふふふ恋ふ

しと思ふふ

平守時新兵衛

三ふふとさんけしの古と月ふふとて思ふふと

貞和百そそふ古ふりけふ時

なみのうへにはかうらんぬ

〈道二郎親王法守

あるかぎりの世の昔よりあまそぐ

慈円

新拾遺和歌集巻第二十

雜躰下　雜部

雜部

神のやまとをそこてしあり

赤人

あかつきの　わたるはるかの　神さびて　あまくもこさき
すりうるる　神はなれなと　はるかにて　ふりさけみれば
まそかの日乃　みをかたいて　てる月の　ひかりもみたに
ふる雪も　いさりてうとと　ときてこそ　高ふり来
ふりつさ　ひつきゆえん　あれあるかい

吉野山をとゝあつまりて

後人しらず

あまをとこ　ゆきのうく山すゝあらし　吉野の里に雪ふる

松ちるせゝり　いけ波たちて　さゝなれ　みぞれ　ふる

おきへは　かりあつまりて　面にふる　あちむらさき

りゝさゝろ　おそろしや人の　あらしそ　ゆきそふ　雪まに

ちらはを　ふりてきひもこゝろ　ふるに

源政長卿の家にて人〻なりつゝ　みる

けふ初冬述懷とゝろんとゝあつ

大納言公雅卿

あるゝ　雪まに　ゆくゝれ　ゆくて　秋の月　ふる

なりあまい　家ゝ　雪を　ひとゝ　雪ふる　雪ふる

ゝゝあまい　ふるけ　おゝ　人〻乃　ふるに　里に

ゆゝあるて　ゝ　ゝ　ゝ　竹のゝゝ

ゝふゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝれ　ゝふ

あゝさゝ　月ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

なゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゆゝゝ　ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

月ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

三さう河より　とみ者ゝ元を　みち義の　あてゝ河よ
なつ海を　ほてゝてそハ　おくみけを　ゝたのゝ中に
ゝくふの　わらし人を　月ゝけ乃　かゝとれ山よ
そしゝそハ　ゝ重てゝそハ　なあゝれ　ゝふゝと
ゝ世世を　秋月よりゝ　あゝてゝて　ゝれも新
ゝとゝて　ゝふゝゝゝ　ゝゝ家や　ゝひ乃ゝと
ゝゝれを　ゝゝぬ新よ　なりゆきい　ゝひふゝなを
あれまゝに　人をゝゝの　ゝ家をゝを　わゝふゝてを
ゝゝて　ゝゝゝを　月ゝゝへを　あゝれ釣乃
なふあゝゝん

鄙ゝ

ふゝや姫　神の袋より　ゆゝあゝれ　万代ゝけて
ひゝゝす　ゝれゝの　なりせゝ　あまゝ空ゝ
三ゝ雲乃　三ゝゝゝに　ゝゝて　新よ雨ゝ
いゝゝゝ　ゝゝゝ　ゝゝゝ　ゝゝれ綿ふ
ゝれゝを　ゝゝゝゝ　ゝゝゝゝ　なふゝゝへて
あゝ山ゝ　れゝゝゝへ　いゝゝへ　さゝゝゝを
なふゝゝに　ひゝてゝゝ　ゝふゝは　なゝれゝの
ゝゝゝへゝ　人をゝゝん　かゝへを　あゝみてゝん
ひゝゝゝ　ゝゝりゝゝ　ゝりへゝも　ゝ行の世乃

新山院御製

玉ぼこの代は　あまたの人と　はぐくみの
ゑまちとり　むかしさながら　うりとりの
玉ぼこさし　うつりかく　あゝ孫も　つるかわさと
こうふりを　後の代まで　こしも　こしも
なりあへる　家ぶりの　なりせて　人の髪りを
いくせん　あまの濱木　うちまそく　あれ髪せぬ
ぬくやまれ　ふれんを　ゆやあゝ海

久安百首うちまりけるうち

たゝ京大夫那輔

うき身ゆゑ　世のふることも　あまのまねを　いつまでいつれ
ぬるつゝ那　とうりあれや　まぶりみ　ひいてゝ山の
そゑ人の　うゝ蓬　海ゝ本を　いとひ捨ゝ
みるまとも　んまとつて　あまほを　あまこまに
かりゝの　ひまゝなを　あれてふ　ゝあとふ
さゝせねを　なくもゆゝを　あゝ身れとゝ
なくそく　み世れとを　ひとひとそく　後の世とたを
ねりひて　ゝ世中を　あゝとゝふたよ
海とひて　ゝ行ゝさゝを　おゝえねく　あまの川ゝ
あゝりゝ　そゝとゝふゝそく　ありなを乃　つまゝれたを
なくつゝ那

返事

月をみていつかもかくなりなとなのめなへとおもふそ

旋頭歌

遠懐の心を

ふるさとにて世をいとふ人に袖をわかつ身をや

八十(ハツテイ)もちかくなりにけるかな

信實朝臣

墨染の袖乃子しかふかはとりて我身りて

ん花乃色やなふそを

藤原有長卿

さとりあるこの世をはなつつるまやまとうの海よ

けりてさゆる波乃上れ哉

折句歌

菊原仲実卿

しけるときさ萩乃枝をつけて

後頼朝臣

うむとみてやあの山に萩のちるをひえをとるみ

返事

藤原仲実卿

うしろめたとふいそ萩をいかなる人とかもとの

前大僧正慈鎮

人をしえそ遥さハ清の花みよの佛乃宿れるそ
春の春にもあらしとあらしとやくへく
とうなとうふとと形句乃とりふりよを
こさて　　ゆき人ふる
りとらまとと嵐うひさそ雲ハのこまを物ハ海ハ
千五百番うち合と形句とて判ハ乃を拾
けっふ同りて　　俊頼朝臣
曇の八乃ふれ歌葉よ時雨ふり物ハ出ふとを月
さ月やとふしとを　　後鳥羽院御製
乃の葉乃歌ハ三乃を消ハ乃やとやうあき身とハ
物名
あ申のまいしてをとふ社とそ乃り　　重之
そとふ葉と
ふやはうはの葉ハ秋乃海人乃そ申つとをを
ひうや　　業平
秋のくとをつゆ葉ハをとみるとりうふ乃神ハ三むん
乃くてひけ　　前中納言定家
秋山よとよ乃ん林葉のひけくとあとゆひ葉
とり三いりとい　　左近中将具氏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらす

大江千里

玉柳みどりなれはの[illegible]

俊恵法師

[illegible]

[illegible]

白雪の[illegible]

[illegible]

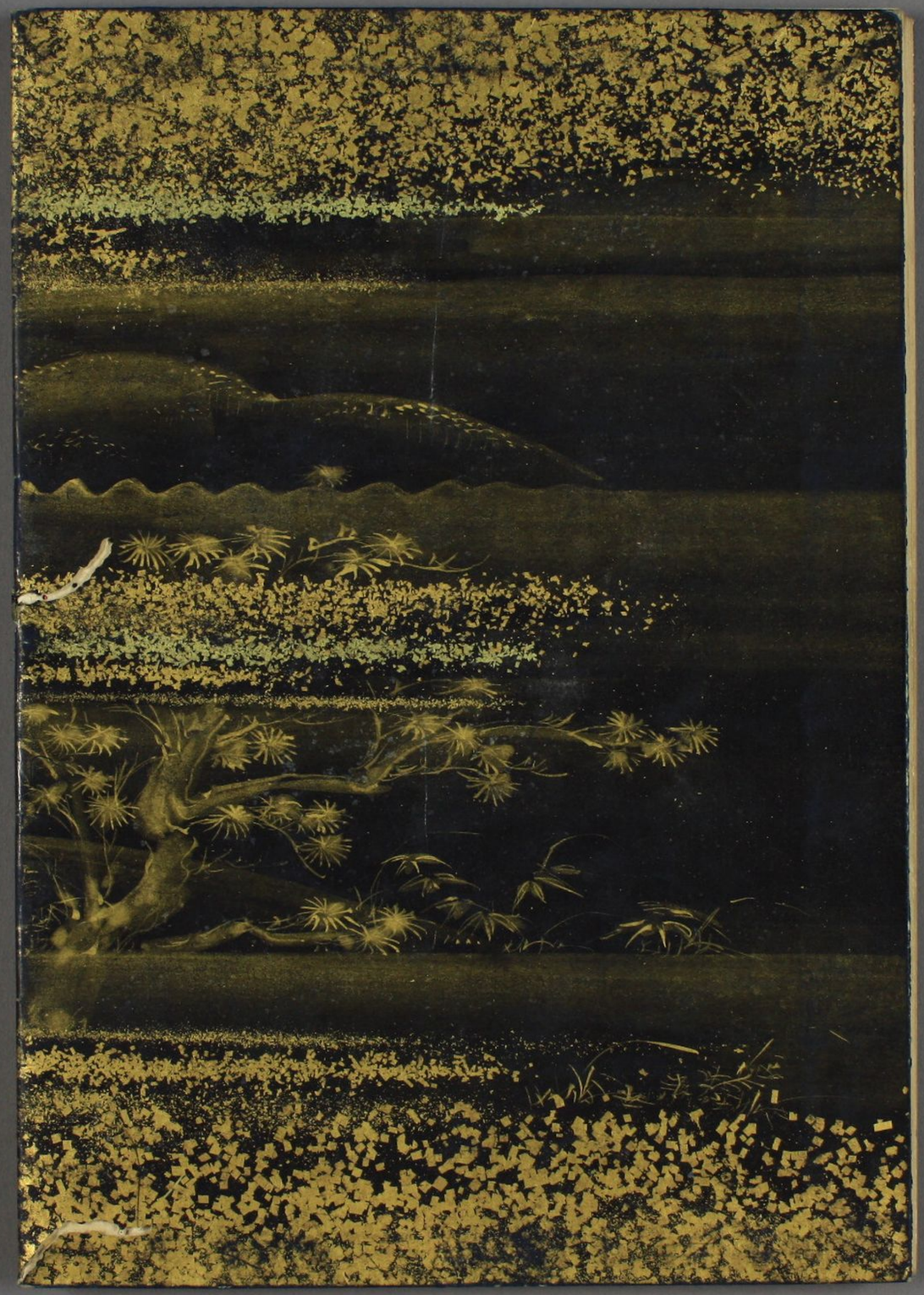
[illegible]

夕あさにかけて志ゑ縄てり侍りしを　ひさ子母人
　　従二位行家
我恋ゆゑ人のつらさやまさるらん　やまぢにとまる秋はそなれぬ
入道二品親王性助法師五十首哥に
風わたる山の麓の花ゆゑ　河波とけてうす氷哉
　　西行法師
わらひと
世の人の日ぐさ分山のさくらゆゑ　ひとりぬれぬ春の夜の月
　　従二位知家
暁水鶏とさゝて
　　よみ人しらず
明ぬまを待あかすこゑの鶏かけぬ　ゆめ覚ぬ道
一夜松ふく鈴鹿とつたりけり
世をゆゑ秋の山ぢ一夜まち今ハ行のみそ恋しき
　　従二位行家
夏の河よみ渡る玉のをとたえて　水底ぬ糸柳ぬ乱
柳過風とふるゝと
　　西行法師
乃ゝ世ハ山のゝ小ふり雨ふる風よりぬ雨柳の家
寛治百首ゝ哥ゝ
　　前大納言為房

つゝぶかの松本に我らうつをみかふひねんて

文保二年百ゝ忌にあたりける時

権中納言雅

大井川ゝぬるれとうひ舟つふとゝひ

四代そうこまき